



おかねをめぐる物語 —江戸の文芸とユーモア—

2018年4月17日(火)～7月8日(日)

出品目録 (草双紙)

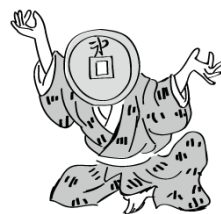
1 江戸のマンガができるまで —江戸時代の出版事情—

No.	作品名	出版年	作者/画工	体裁	資料番号
1	合巻『宝船黄金梳』 (たからぶねこがねのほぼしら)	1818 (文政元)年	東里山人 /勝川春扇	1巻1冊5丁 (上巻に相当)	904487
2	黄表紙『江戸春一夜千両』 (えどのはるいちやせんりょう)	1786 (天明6)年	山東京伝 /北尾政演 (山東京伝)	3巻合綴1冊15丁	904492



2 擬人化されたお金たち —お金が主役のものがたり—

No.	作品名	出版年	作者/画工	体裁	資料番号
3	黄表紙『再会親子銭独楽』 (めぐりあうおやこのぜにごま)	1793 (寛政5)年	唐来参和 /北尾政美	3巻合綴1冊15丁	904503
4	黄表紙『再会親子銭独楽』 (めぐりあうおやこのぜにごま)	1793 (寛政5)年	唐来参和 /北尾政美	3巻合綴1冊15丁 (半紙本に改装)	904504
5	合巻『宝船黄金梳』 (たからぶねこがねのほぼしら)	1818 (文政元)年	東里山人 /勝川春扇	2巻合綴1冊10丁 (中・下巻に相当)	904494
6	黄表紙『金銀太平記』 (きんぎんたいへいき)	1791 (寛政3)年	荒金土生 /桜川文橋	2巻合綴1冊10丁	904498



3 お金の精、あらわる！ —いつもそばにいるお金たち—

No.	作品名	出版年	作者/画工	体裁	資料番号
7	黄表紙『新鑄小判耳たぶ』 (しんぶきこぼんのみみたぶ)	1795 (寛政7)年	十返舎一九	3巻合綴1冊14丁 (第12丁落丁)	904499
8	黄表紙『新鑄小判耳たぶ』 (しんぶきこぼんのみみたぶ)	1795 (寛政7)年	十返舎一九	3巻合綴1冊15丁	904497
9	黄表紙『銭鑑貨写画』 (ぜにかがみたからのうつしえ)	1800 (寛政12)年	曲亭馬琴 /北尾重政	3巻合綴1冊16丁 (冒頭に「曲亭稗史」 1丁を合綴)	904477
10	黄表紙『銭鑑貨写画』 (ぜにかがみたからのうつしえ)	1800 (寛政12)年	曲亭馬琴 /北尾重政	3巻合綴1冊15丁	904493

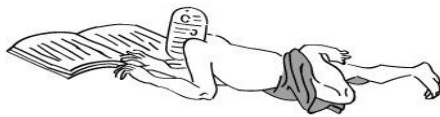


4 お金たちがいうことには… —お金が語るありがたい話—

No.	作品名	出版年	作者/画工	体裁	資料番号
11	黄表紙『平仮名銭神問答』 (ひらがなせんじんもんどう)	1800 (寛政12)年	山東京伝 /歌川豊国	3巻合綴1冊15丁	904476
12	黄表紙『平仮名銭神問答』 (ひらがなせんじんもんどう)	1800 (寛政12)年	山東京伝 /歌川豊国	3巻合綴1冊15丁	904475
13	黄表紙『平仮名銭神問答』 (ひらがなせんじんもんどう)	1800 (寛政12)年	山東京伝 /歌川豊国	3巻合綴1冊15丁	904474
14	黄表紙『替銭通用双六』 (かわりぜにつうようすごろく)	1796 (寛政8)年	十返舎一九	3巻合綴1冊15丁	904500
15	黄表紙『替銭通用双六』 (かわりぜにつうようすごろく)	1796 (寛政8)年	十返舎一九	3巻合綴1冊15丁	904496
16	合巻『運輝長者之万灯』 (うんはかかやくちょうじゃのまんどう)	1812 (文化9)年	関亭伝笑 /歌川国長	2巻合綴1冊10丁	904486



資料紹介



合巻『宝船黄金槍』

世の中のお金には、「人の命を奪うお金」、「世間知らずのお金」、「浮世を捨てたお金」など、さまざまな性格のものがあることが紹介されています。



イヤもう必ずお構い下さるな。私はこれよりすぐにおいとまいたします。はなはだせわしない飛脚の身の上、たはこ一服でもうか、とはなりません。又ご縁もござりましたらお目に掛かりましよう、そこへ出して出て行く。ヤレ情けねえ。せつかく骨を折って連れて来た金が飛脚で、上へも上がらず、門下口（かどぐち）からすぐにおいとまとは、あまり情けねえ仕打ち。せめて今宵はこの家泊まり下され、と言つてもなかく得心があらばこそ、間かぬふりして走りゆく。

まアちよつと上がりはなで顔を見せたばかりサ。

上へも上がらずに、すぐに出て行くと、は、あまり情け無い仕方でございます。

それではとんと心が落ちつかぬ。まア上がりなせえ。

魯褒が銭神論に、翼無くして飛び、足無くして走ると言ひしは、名言だ。

〈場面の大意〉

世の中に「飛脚の金」と言われる金がある。脚が速く、常に股引・草鞋で世界を駆け巡るため、片時も人の家に座らない。このような金は、家の内へも上がらず、入り口からすぐにおいとまするという。

上の場面では、「飛脚のお金」が絵入りで解説されています。このお金は脚が速く、家には居着かないとされ、家の者が引き留めている様子や、せわしなく走り去って行くお金の様子が、書き入れ（セリフ）から読み取れます。

黄表紙『平仮名銭神問答』

親から譲り受けた財産を湯水のごとく使う主人公が、「お金」の神や精たちに導かれてお金の尊さを知り、一文銭をもらって目が覚めるという内容です。その後、主人公は改心して稼ぎ、金持ちになりました。



初がつおも銭の羽が生えて、世界を飛ぶ。

俺もこれではホストと見えるわえ。

なんと銭の徳を見たか。あだ（むだ）には使われまいが。

どんなに知恵のない者でも、銭さえあれば、身を動かせる知恵があるように見えるものだ。手足に銭のおもりが付いてあるからである。

舞ったり。

〈場面の大意〉

銭の精霊は、理兵衛に銭の遠眼鏡を貸して、銭の徳の尊い様子を見せる。千里の道に行くにも銭があれば、馬・駕籠・船を思い通りに使えて、くたびれることはない。これは、銭がお足にくっついて走らすゆえである。鯉に乗って波を走り、鶴に乗って雲を飛ぶ。仙術よりも、この銭術が早道である。

上の場面では、主人公が銭の精霊から借りた銭の望遠鏡「銭利鏡」を使って、お金の「徳」（効力）を覗いています。銭があれば足や翼として移動できることや、知恵がなくても知恵があるように見える、といったことが書かれています。